八丈島の疱瘡史

對馬　秀子，土屋　　久，酒井　シヅ

八丈島は，絶海の孤島であるが故に古より疱瘡のない地域として，これまで橋本伯寿の『翻訳断毒論』や原南陽の『叢桂偶記』巻2などによって紹介されてきた．本発表の目的は，これまで断片的に伝えられてきた八丈島の疱瘡について7種の写本『八丈島年代記』，及び他史料から出来うる限りその史実を明らかにすることである．

『八丈島年代記』は，1400年代中葉からの八丈島，小島，青ヶ島の支配者，貢税，災害，飢饉，疱瘡や麻疹などに関する記録である．7種の年代記には，筆写が不明なもの，年度の欠落，死者数および年号と干支など一致しないものもあるが，中世からの歴史の概要を記す貴重な史料であることに違いはない．史料にある約400年間に瘧病3回，疫病3回，疱瘡12回，疫痢3回，麻疹1回，不思議の病気2回が記録されている．そのうち，漂着船や帰帆した船の乗船者から発症したとあるのは，疱瘡7回，麻疹1回である．

橋本伯寿や原南陽が取りあげた八丈島の疱瘡は，①正徳元年（1711）11月下旬の三根村に流れ寄った大阪伝法船から，②天明7年（1787）樫立村百姓幸助という者から，③寛政7年（1795）八丈島の高橋長左衛門船に乗船していた三根村民からの流行，の3件である．②に関しては，『翻訳断毒論』に，③については，『叢桂偶記』巻2に流行時の対応や病死数まで詳細に述べている．

ところで，『叢桂偶記』巻2にある寛政7年の事例の中で「……醫議（ママ）曰，痘瘡也……」とあるが，島で医師を雇用したのは明治になってからである．年代記には，困窮時の救済には，神主，卜部，祝が神祭を行ったとある．詳細は不明ではあるが，近世においては流人の医師が存在した．八丈島の流人は，慶長11年（1606）の宇喜多秀家から始まり明治4年（1871）までの265年間に約1,900人という．その中に医師は，村田道珍斎（助六），山本隆庵，岸井順庵，太田道寿，伊香泰元，細川宗仙，山本春南の7名と素人医4名の名前が挙げられている［葛西重雄・吉田貫三『増補四訂八丈島流人銘々伝』1995］．細川宋仙は，江戸幕府のお抱え医師で安永5年（1776）から文政9年（1826）までの51年間在島していたので，2度の疱瘡流行に遭遇したことになる．

その他では，寛政3年（1791）4月27日薬草木御用の為，医師田村元長，井上貞才，高野良智，藍川玄慎，井上玄亨ら都合13人が来島し1ヵ月ほど滞在した．「御廻状並御書付願留」（葛西氏所蔵史料）には，マダミ，山帰来，明日葉を持ち帰ったとある．田村元長とは，江戸中期の医師・本草学の田村藍水の長男である．この薬草調査に田村親子の下で学ぶ鈴木良知（素行）が随行し，後に『醫海蠡測』を著して八丈島の疱瘡について触れている．八丈島で種痘が行われたのは意外に早い．幕末の伊豆七島は江川太郎左衛門英龍が代官であった為に，長崎に牛痘苗がもたらされた翌嘉永3年（1850）には支配地駿豆甲武相に告諭を発して種痘を実施，「……，遠く八丈島三宅の孤島に渡って牛痘の理を説き聞かせて接種を行ったことは，……」とある［戸羽山瀚編著『江川坦庵全集』1972: 147］．明治12年（1879），種痘術の免状を受けた医師・何越逸記と雇内弟の関任詮が島で開業の為に渡島した［明治12年御用留：高橋整家所蔵史料］．次に，翌明治13年に雇医4名，明治15年には開業の為田村新治郎医師が来島した［『八丈島誌』1993: 814］．疱瘡流行で特筆すべきは文久3年（1863），国本（本土の事）より帰島した三根村民から流行し2年間でおよそ500人が死亡した．その渦中の元治元年（1864），『八丈実記』巻7（378頁）に「此節長崎丸漂流ノ医師ヲ頼ミ，入レボウソウ致サセタル者ニ一人モ死亡コレナク……」とある．医師とは，大阪の緒方精

斎，長崎の吉雄幸澤という．これ以後，疱瘡流行の記録は見られない．

『八丈島年代記』には，次々襲い来る災害・飢饉に加え疱瘡が持ち込まれ，餓死，病死の文字が続くが，両者は深く関係しその区別は曖昧であるとも考えられる．史料からは，飢饉で山へ牛喰らいに出，疱瘡流行で山へ逃げ，災害が続くと神祭を行い，飢饉で困窮の際には島民同士の合力も行われていたことなど島の暮らしの一端がうかがわれる．

（平成25年3月例会）

陶烈と日本医学界

藤田　梨那

医学の分野における日中両国のつながりはおよそ明治期から始まる．明治中期に起こった第一次日本留学ブームのなかで，多くの中国青年が日本にやって来て，近代医学を学んだ．中国の医学の発展はこれら留学生の貢献によるところが多い．留学生のなかに優秀な研究者も輩出した．陶烈はそのひとりである．京都帝国大学医学部に学び，東京帝国大学，東北帝国大学で脳研究の最前線を突き進んだ．不幸にも病気により30歳の若さで夭折したが，わずか10年ほどの間に，神経学，条件反射，心理学，生理学，脳神経学について多くの研究成果を残した．あまりにも若くして亡くなったので，日本医学界や中国においても彼を知る人は少ない．しかし，陶烈の研究はその先進性において，日本医学史に残した痕跡は小さくない．医学史研究でその業績を明らかにする必要はあるのではないだろうか．

一，日本で学んだ歳月

陶烈は1900年（M33）1月22日，中国無錫の大家の二男として生まれた．兄は陶熾こと陶晶孫である．1907年7歳の時に来日し，東京精華小学校に入学した．その後東京府立第一中学，第一高等学校を経て，1919年京都帝国大学医学部に入学した．兄陶晶孫はその年に九州大学医学部に入学した．兄弟は2歳離れていたが，中学，高校，大学は同じ年に進学した．1923年京都帝国大学を卒業したが，直ちに京大生理学教室に入り，石川日出鶴丸教授に師事した．1925年から東京帝国大学精神科学教室に入り，三宅鉱一教授について，脳神経の研究に従事した．1925年～1927年の夏に青森県浅虫臨海実験所にて下等無脊椎動物の実験を行なった．1928年第4回太平洋学術会議に出席した．この時期から結核を患い，一時期伊豆へ転地療養をした．1930年に30歳の若さで中国広東中山大学教授となる．同年8月機材購入のため来日した際，扁桃腺の手術を受けたが，術後蜂窩織炎で急死した．享年30歳．

在日中日本医学界の友人に，林髞（大脳生理学者，条件反射研究者），黒田源次（心理学者，条件反射研究者），柘植秀臣（大脳生理学者），小川鼎三（東京大学教授，脳比較解剖学者）など，日本医学界の著名な学者らがいる．またジャーナリスト尾崎秀実も陶烈，陶熾と親交をもっていた．

二，医学研究とその業績

陶烈は京都帝国大学を卒業後，石川日出鶴教授の生理学教室に入り，生理学及び心理生理学の研究を続けた．その間，ドリーシュの生気論やパブロフの心理学に注目し，翻訳と論文を多く発表している．1923年に翻訳『ドリーシュの生命論』を泰光社から出版した．1924年に雑誌「生理学研究」に論文「条件反射の実験的研究」，「統計二つ」，「心理生理学 Max Verworn 翻訳」を発表した．1925年に同雑誌に「原始芸術と原始思想 Verworn 翻訳」，「人間精神の進化 Verworn 翻訳」を発表し